

過去約2年間に発行された書籍の中から時事的で話題性があり内容豊かなものを会員のご要望に応えながら編集委員会が選択して紹介いたします。

### 『はざまのわたし』

深沢潮 著 | 集英社インターナショナル、2025年、304pp.

私が深沢潮という作家を知ったのは、昨年の『週刊新潮』7月31日号に高山正之の「創氏改名2.0」と題する連載コラムが載ったことによります。この中で高山は、在日コリアンなど外国にルーツがある人々が日本を批判する場合には「日本名を使うな」といった内容の乱暴な主張を行い、著名人の名前を晒して攻撃しました。その一人が、深沢潮でした。

在日コリアンの人々が通称名を使うのは、歴史的な背景や差別の問題に加えて、様々な理由や事情があつてのことです。深沢は本書の中で、自分の母親について以下のように書いています。

二世の母は戦後わずかのあいだ民族学校に通ったものの、その後転校した日本の学校で自分かなりの差別を受けた経験と、父親(私の祖父)が関東大震災で自警団に殺されかけたことがあったので、韓国人であることをなるべく伏せて生きてきた。だから、身体の弱い姉を守るため、いじめられないために、韓国人であることを周囲に極力隠そうとしてきたのだ。(7P.)

深沢自身も、重い心臓病を患う姉が小学校にあがる時、病気に加えて出自によるいじめを受けないようにとの両親の思いから、父の考えた通称名を名乗ることになったそうです(なお「深沢潮」はペンネームです。深沢はデビュー以来、出自を隠したことはありません。高山による攻撃は全くのフェイクです)。

差別とデマに満ちた高山のコラムと、そんなコラムを掲載し拡散した新潮社には、多くの批判が集まりました。しかし2026年2月現在、どちらも未だに差別の責任を認めようとしていません。この事件をきっかけに、次第に私は深沢潮の作品と、生きる姿勢に関

心を持つようになりました。

深沢ほど、自らのルーツと、自らが暮らす日本という国の両方と誠実に向き合う作家は稀だと思います。父親の人生をモデルにした『海を抱いて月に眠る』、戦時中の朝鮮と沖縄、そして日本との間で生きた女性を描いた『翡翠色の海へうたう』、いずれもお勧めしたい作品です。

本書『はざまのわたし』は、“食”をテーマにしたエッセイ集ですが、巻末に深沢自身のこんなことばが記されています。

食べることは生きること。生きてきた軌跡の断片を、このエッセイに書いた。(300P.)

本書には深沢潮という、日本と韓国の「はざま」で生きてきた女性の悲しみや生きづらさ、そして喜びと希望が込められています。複雑で、でも優しい味がする本です。

(評/滋賀大学経済学部教授/青柳周一)

